

都市中小河川流域における水辺空間利用と河川整備の変遷に関する研究

日本大学大学院 学生会員 ○菊原 綾乃
日本大学 正会員 阿部 貴弘

1. はじめに

近年、かわまちづくり支援制度やミズベリングプロジェクトなどの水辺を活用したまちづくりに関する活動が全国で展開され、河川に関わる様々な機関や団体等が河川を公共の財産として価値を見出し、水辺を使いこなす意識が向上し¹⁾、水辺を楽しむ文化が形成されつつあると考える。東京都では、『未来の東京』戦略ビジョン²⁾にて水辺の活用に注力している³⁾様子が伺える。

一方で、水の都として繁栄した近世江戸においては、江戸名所図会等に見られるように現代と比べても多様な水辺利用の手段が記載されている。また、既存研究³⁾より治水対策との整合性を図りつつ、水辺利用を念頭に置いた水路整備が行われていたと考える。

こうした近世や近代における水辺空間に関する研究は多くの蓄積がある⁴⁾。しかし、河川事業と水辺空間利用の関係性について、どのような事業を行い、水辺空間利用にどのような影響を与えたかについては歴史的な考察が十分されているとは言い難い。

本研究では、今後の河川整備に資する知見を得るべく、水辺空間の変遷を河川事業と水辺の景観・利用の変化に着目して明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象

本研究では、近世以来様々な水路整備が行われた江戸・東京の中心部を流れる主要な河川である神田川及び日本橋川を対象とする。神田川については、江戸朱引内に位置する旧江戸川より隅田川河口部までを対象とし、1590（天保 18）年より 1937（昭和 12）年の神田川改修までの年代について調査を行う。

3. 研究方法

研究方法は表 1 及び図 1 に示す通りである。本研究では、近世の水辺の様子を表す文献として江戸名所図会等⁵⁾の資料を、土地利用を把握するために絵図⁶⁾、地形図⁷⁾等を用いた。文献調査を補う形として古老、河川管理者等を対象にヒアリング調査を実施した。

表 1 調査項目及び調査方法

調査項目	調査方法	調査内容
治水の変遷の把握・整理	文献調査 ヒアリング調査	河川・水路整備の履歴の把握 水害の履歴及び規模、被害範囲の把握
水辺利用の変遷の把握・整理	文献調査 現地調査	土地利用変遷の把握
環境の変遷の把握・整理	文献調査 ヒアリング調査	景観 レクリエーションの変遷の把握

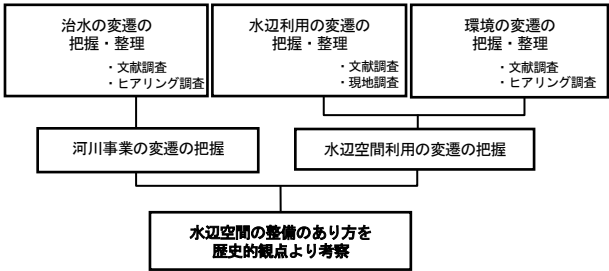


図 1 研究のフロー

4. 研究結果

本稿では、神田川を対象として調査結果を示す。

(1) 河川事業の変遷の把握

水害の履歴について、文献史料⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾より、被害場所に着目すると、旧江戸川区間では、右岸側に被害を受けている記載多く見受けられ、目白・小日向台地に沿った場所に河川が流れていることからわかる。

河川整備の主な変遷について示す（表 2）。

表 2 河川事業の主な変遷^{8)~13)}

西暦 (年)	和暦 (年)	河水路整備等の変遷	工事概要	場所
1590	天正 18	神田上水工事開始	上水工事	
1616	元和 2	神田川開削開始	宅地造成 城北軍備	
1659	萬治 2	神田川の堀割御普請		
1660	萬治 3	小石川御堀普請		神田和泉橋・牛込間
1728	享保 13	神田川の拡幅工事 神田川を北側に切広げる	拡幅工事	
1750	寛延 3	江戸川・神田川浚渫	浚渫工事	
1889	明治 22	神田川改修 江戸川改修	拡幅工事	牛込神楽坂河岸より大川に至る 石切橋より船河原橋に至る
1901	明治 34	神田上水廃止/東京砲兵工廠の工業用水となる		
1910	明治 43	護岸工事に伴う江戸川公園建設	護岸工事	
1926	大正 15	江戸川改修	大洗堰撤去	
1931	昭和 7	東京都市計画江戸川改修	護岸築造/大曲の屈曲緩和/浚渫工事/物揚場の設置	船河原橋より駒塚橋上流郡市境
1937	昭和 12	東京都市計画神田川上流改修計画	護岸築造/護岸改良/拡幅工事/浚渫工事	飯田橋下流より小石川橋に至る両岸

キーワード 水辺空間、河川整備、神田川、河川景観、都市中小河川

連絡先 〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台 3-11-2 日本大学理工学部まちづくり工学科 S1204 TEL 03-3259-0485

既存研究より、近世後期の治水思想¹²⁾について言及されている。これを踏まえると、河川整備は近世から近代にかけて地形をむやみに改変しない整備から、急速な市街化の進行と共に、河川整備の必要性も仰がれ、拡幅、浚渫等の複数の整備を同時に行えるようになり、河川整備の思想が変化したことが伺える。

(2) 水辺空間利用の変遷の把握

土地利用及び近世、近代以降名所として描かれていた場所を図2にまとめた。近世の間は対象地周辺の土地利用は大きな変化は見受けられなかった。旧江戸川区間の上流部の右岸側は宅地として開発がされていないこと、水害の履歴を鑑みると水害時に被害に見舞われやすい状態であったことを考慮した開発であった可能性がある。

名所については交通の主要であった神田川で様々な名所が描かれている。対象としては橋梁、堰などの構造物、掘割や台地などの自然地形などがある。近代になると、橋梁、自然風景共に名所として描かれてはいたが、近世より名所として継承されている場所はほとんど見受けられなかった。加えて、自然風景が名所となっている場所は自然河川、橋梁等が名所となっている場所は人工の掘割運河であることが把握できた。名所として継承されなかった目白下大洗堰では、夏には涼む場所としても人気の高い場所であり¹⁴⁾、ヒアリング調査では明治後期では、子供たちの遊び場となっており、名所から遊び場として認識が変化したと考える。

新たに名所として位置づけられた旧江戸川区間では関心を持たれることは少なかった場所の風景を改め¹⁵⁾、新たに桜の名所として絵葉書や写真にその価値が伝えられ

た。ヒアリング調査では、河川整備の行われた昭和初期には、名所としての櫻の光景は無かったが、人々が水辺に憩いの場として滞在していたことを把握した。

5 まとめ

近世から近代にかけて河川整備の思想の変化により、名所として存在していた水辺空間は、名所ではなく遊び場や、憩いの場へと変化したと考える。河川整備により環境が大きく変化しても、かつて名所として親しまれていた場所は、人々の集まる場所であることには変わりなかった。それは、人々が滞在しやすいような水辺空間と、屋台などの滞在を促す要素が存在していたことが要因である可能性がある。

今後は個々の河川整備をより詳細に把握し、水辺空間利用との関係について分析を精緻にする必要がある。

参考文献

- 1) 国土交通省近畿地方整備局：水辺活用ノウハウブック，2018
- 2) 東京都：『未来の東京』戦略ビジョン，2019
- 3) 江口真由，阿部貴弘：『徳川実紀』にみる江戸時代前中期の
水害対策に関する研究，日本大学理工学部学術講演会
予稿集，F-62，pp.373-374，2019
- 4) 例えば，橋本政子，堀繁：江戸の川岸の張り出し・引き込みとその効果—江戸
戸名所図会等を分析資料として—，第 34 回日本都市計画学会学術研究論文
集，pp37-42，1999/鹿内京子，石川幹子：東京下町における河岸の歴史的変
遷に関する研究，日本都市計画学会都市計画論文集.No.41-3，pp959-964，2006
など
- 5) 長谷章久：日本名所図会全集一巻～四巻（江戸名所図会）名著普及会，1975/
大野光次：江戸百景今昔—江戸を楽しむ，大正を知り，現代を歩く，本の
泉社，2010/小島又市：最新東京名所写真帖，明治 42
- 6) 景山政恭，戸松昌訓，井山能知：（江戸切絵図），嘉永 2-文久 2(1849-1862)
- 7) 東京市：5 千分 1 地図，1500，参謀本部陸軍部測量局，明治 16-17(1883-1884)
測図
- 8) 東京市役所：東京市史稿，変災編第 2，東京市役所，1915
- 9) 東京市役所：東京市史稿，変災編第 3，東京市役所，1916
- 10) 佐藤，照子：歴史市街地水害の復元とその水害土地環境，東京神田川における
事例研究，自然災害科学会，自然災害科学，14(1)，pp59-76，1995
- 11) 土木学会：明治以前日本土木史，1936
- 12) 知野泰明：徳川幕府法令と近世治水史料における治水技術に関する研究，土
木史研究第 11 号，pp49-60，1991
- 13) 斎藤月岑：武江年表，1912
- 14) 新聞集成明治編年史編纂會：新聞集成明治編年史 第三巻，p33，1936
- 15) 新聞集成明治編年史編纂會：新聞集成明治編年史 第八巻，p230，1936
- 16) 国土地理院図基盤地情情報

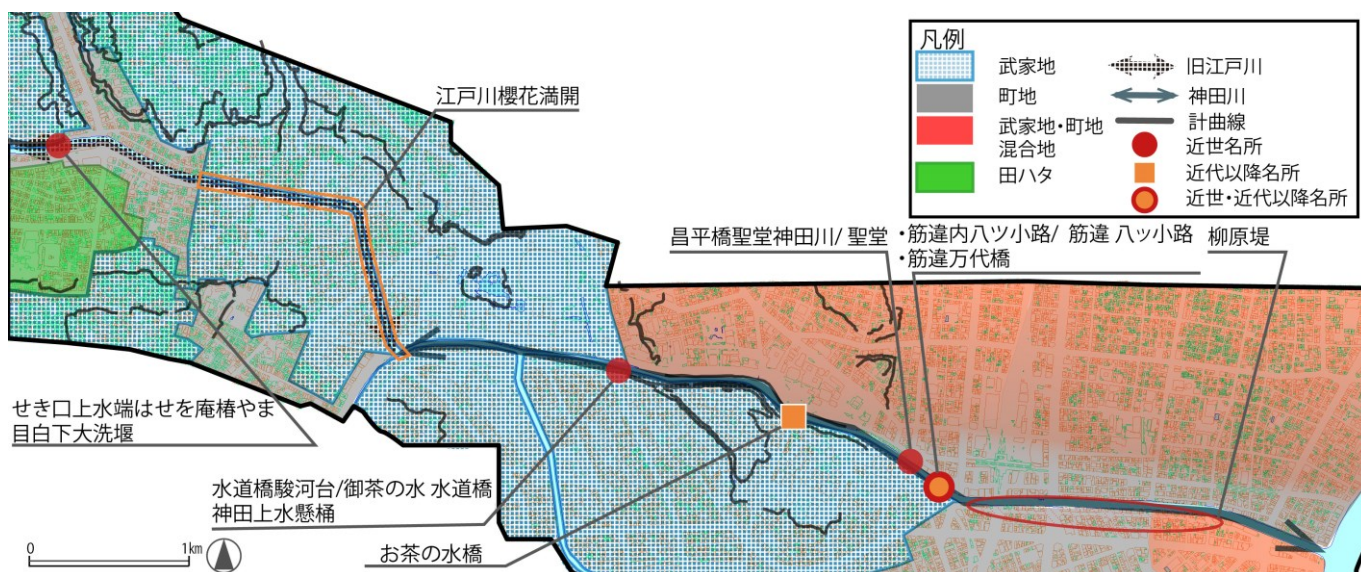


図2 近世の土地利用と名所^{5)~7)16)}